小学校におけるハンドボールの教材化について

宮本真一(小学校課程　保健体育副専攻)

＜序論＞研究動機・目的・方法

これまでになされてきた、ハンドボールに関する様々な研究や授業実践、またその他多くの人達の努力とハンドボールの教材価値が認められ、ハンドボールの小学校指導要領への導入が認められた。そこで本研究では、ハンドボールの教材化における問題点とその課題を明らかにすることを目的とし、小学校の教師となりハンドボールの授業を行うときの基礎理念を確立できるようにしたいと思った。その方法として、まず教材化とは何かということを明らかにする。そして、これまでの数々のハンドボールに関する文献をあたり、上述の視点からそれらの問題点や課題を探っていくこととする。

＜本論＞第一章　教材化とはなにか

教材化とは、学習内容をクラス全員に習得させるために、「素材」を子どもの興味・能力・発達段階・運動レディネスに合わせて修正したり、再構成を図ったりする作業のことである。また、(1) 学習内容を含んでいる教材、(2) 子どもの発達特性に合っている教材、(3) 子どもの運動文化になり得る教材、(4) 一般化できる教材（再現性)、(5) 単元としてまとまりがある教材（教材の組み立て）の 5 つの条件を満たすような教材づくりが望ましいと考えられる。

第二章　これまでの教材化における問題点

本章では、これまでの教材化における問題点を明らかにするために、ハンドボールの教材化についての研究や実践報告を、1.目的、2.方法、3.結果という視点でまとめた。それぞれ様々な工夫がなされていたが、「ハンドボールの構造特性」という視点からの検討はあまりなされていないようであった。また、「子どもの運動レディネス」に合わせたハンドボールの教材化の研究はなされていないということが明らかになった。

第三章　教材化のための課題

本章では、教材化のための課題を明らかにするために、まずハンドボールの構造特性を把握することとした。そのことにより、ハンドボールは、戦術の「動きの形」という視点から「敵陣突破型」のゲームであり、「身体妨害」が許されるスポーツであることが明らかになった。また、ハンドボールプレイヤーはすぐれた「先取り能力」と「反応能力」が必要とされることも明らかになった。次に、Meinel,K. 著「マイネル・スポーツ運動学」の小学生の運動発達の部分を参考にしながら、小学生の運動レディネスを明らかにした。そのことにより、6～8 歳の子どもは、強い活発性が特徴的であり、運動欲求がかなり強いということが明らかになった。また、9～11,12 歳の子どもは、もっとも有利な学習期の期間にあり、「即座の習得」という能力も備えているということが明らかになった。

＜結論＞

本研究では、ハンドボールの教材化における問題点とその課題を明らかにすることを目的として行った。その結果、ハンドボールの構造特性に関する検討が十分に行われていないということと、ハンドボールの教材化を進めるにあたって、小学生の運動レディネスに合わせた研究がなされていないという 2 つの問題点が明らかになった。第三章で明らかになったように、6～8 歳の子どもは強い活発性と強い運動欲求が見られるので、この時期の子どもには、思いっきり走り、跳び、投げることができるスポーツ・運動が教材として適していると言えるであろう。また、示された運動課題を明確にとらえ、さらに成し遂げていく能力を養成することも大切である。そこで、ハンドボールのような目標のはっきりした運動が適していると考える。しかし、小学校低学年にとって正規のハンドボールを行うことは難しいと考えられるので、簡易化したルールで行うのがよいだろう。9~11,12 歳の子どもは、もっとも有利な学習期にあり、この年齢層の主要課題は全面的な運動系の発達である。ハンドボールは、運動の基礎形態をすべて含んでいるし、ゲームを通じて多面的な身体能力と情況判断能力が養われる。そのうえ、人間がもっとも器用に動かすことのできる手でボールを扱うので戦術が立てやすく、実行しやすい。このことは、十分将来役に立つことであると考えられる。このように、ハンドボールの構造特性と子どもの運動レディネスを十分把握したうえでの教材化がこれからの課題となるであろう。そして、私が将来教職につき、本研究を基に授業を行い課題を解決していきたい。

―引用・参考文献省略―